2019年11月04日 中日新聞 朝刊 21頁

聞き続ける　報じ続ける

被災者に公開取材

国内最大級の総合防災イベント「ぼうさいこくたい2019」（防災推進国民大会）の関連行事、「地域の災害を伝える全国の地元新聞」が10月20日、名古屋市中村区の名古屋コンベンションホールで開かれた。会場では地方新聞4紙の記者が伊勢湾台風、阪神大震災、東日本大震災、西日本豪雨の被災者に公開取材し、伝えるべき記憶と教訓を来場者と分かち合った。「備える」で内容を詳報する。

中国新聞の鴻池尚記者（手前右）の公開取材で、西日本豪雨の被災経験を語る小川直明さん（同左）＝いずれも名古屋市中村区の名古屋コンベンションホールで

伊勢湾台風

子2人犠牲 叔父の無念

佐野仁さん（77）

六十年前の伊勢湾台風の時、私は高校二年生で、愛知県弥富市の自宅にいた。あまりに風が強く、これはおかしいと思って雨戸を開けたら、庭に水が迫っていた。表に出たとたん、首まで水につかった。必死に堤防の上まで駆け上がると、土手が半分欠けていた。

そっとした。

小学四年と二年だったいとこが犠牲になった。二人の遺体を見つけた叔父に「燃やしといてくれ」と言われた。ぼんぼんに膨らんだ二人のおなかに、とがらせた青竹を突き刺して水を抜いた。遺体に水が入っていては燃えないからだ。今でも思い出すと泣けてくる。叔父はなぜ、私に命じたのか。今なら分かる。自分の子を燃やすことはできなかったんだろう。本当にかわいい二人だった。

六十年たち、私も喜寿を迎え、話しておこうと思った。地震や台風は自然現象。でも、もっとごりだ。

東日本大震災

昇降口 壁のような津波

雁部那由多（なゆた）さん（20）

二〇一一年の東日本大震災発生当時、私は宮城県の沿岸部にある東松島市大曲小学校の五年生で、授業中だった。津波が来たのは、避難のため昇降口にいるとき。最初はスーッと流れてきた波が、あるときドンと壁のように押し寄せてきた。

つかまるものがあり、波にさらわれながらも助かった。目の前で、避難してきた大人たちが流されていった。見殺しにしてしまった―。そう感じた。

中学生の時から体験を語る機会があり、16歳の語り部」という本にもなった。最初は閉じ込めた記憶を吐き出して楽になりたかっただけ。でも今は、自分の体験を防災のため使ってもらえたらいいと考えている。

大学で災害社会学を学んでいる。災害時の人の行動や心の動き、あの時の自分自身も研究の対象。研究者の道に進み、多くの人に還元できるようになりたい。

阪神大震災

語ることで気持ち整理

小島汀（みぎわ）さん（28）

一九九五年の阪神大震災当時は、兵庫県芦屋市に住んでいた。当時三歳で記憶はほぼないが、母に聞くとがれきの中に二時間半ほどいた。小学三年まで暗い所で眠れず、トラウマ（心的外傷）があったと思う。

震災で亡くなった父は、キャンプやご揚げに連れて行ってくれるようなアクティブな人だった。小学生の時に父に手紙を書く機会があったが、何を書いていいか分からなかった。自分の大切な人がいてくなった震災に向き合い、多くの人に伝える人でありたいと考えるようになった。

以降、震災について語る場を多くもらい、語ることで気持ちを整理してきた。東日本大震災では少しでも被災者の心の支えになればとボランティアも。心に残ったのは「元気な姿を見せてほしい」と言われたこと。二十四年たち、こんなに元気になれることや大きな災害が続く中で守れる命があることを伝えていきたい。

西日本豪雨

勇気持って早く逃げて

小川直明さん（70）

広島県熊野町にある三百人ほどの団地に暮らす。昨年の豪雨の日、「避難情報も入っていたが、「大丈夫よね」と妻と確認し合い、小学生の孫と三人で家にいた。

午後八時ごろ、ドドー、ゴーとすごい音がした。土石流が隣の家の前まで来ていて女性の悲鳴も聞こえた。車で避難したが、道は土石流でふさがれていた。転石があり危険だと脇道にそれた直後、二度目の土石流が元の道を流れていった。今も雨が降ると恐怖を覚え、動悸が激しくなる。

今振り返ると、避難情報の重要性が理解できてなかった。たまたま緊急避難できて救われたが、いつも偶然助かるわけではない。住む土地で起こり得る災害を想定し、できる限り備え、危険を感じたらできる限り早く勇気を持って逃げることが大切。被害後、地元で「復興の会」を立ち上げた。住民同士が声掛けできる関係を広げていきたい。

4紙記者 座談会

公開取材を終えた記者ら四人は、座談会で地方紙としての役割や今後に向けた課題を話し合った。

（司会進行は中日新聞社会部の後藤厚三震災・防災デスク）

中日新聞社会部・西田直晃記者　伊勢湾台風六十年の取材テーマは「語り継ぐ」。当事者世代の記憶を伝える最後の機会と捉えたからだ。読者からは二百通以上の証言が寄せられた。かつて起きた災害の記憶を伝え、今後起きるかもしれない災害の備えにつなげる。その使命感は読者とも共有できた気がする。

神戸新聞報道部・長沼隆之部長　阪神大震災は戦後初めて都市部を襲った直下型地震で、避難所などでの震災関連死が初めて認められた災害でもある。私たちは今も、犠牲になった六千四百二十四人の一人一人の人生を追い続けている。被災者、遺族と痛みを分かち合うことが次の災害への備えにつながる。

中日新聞の西田直晃記者
神戸新聞の長沼隆之報道部長

「伝えて備える」読者と共有／犠牲者ゼロ 目標

河北新報防災・教育室・北條哲広主任　東日本大震災の教訓を踏まえ、地域住民らと一緒に地震や津波への備えを考えるワークショップ「むすび塾」を毎月開いている。町内会や企業、学校などを巡回し、来年に百回を数える。次の災害では一人の犠牲者も出さない。その共通目標に向け、手探りでも地域とともに考え続けたい。

中国新聞報道部・鴻池尚記者　災害が起きると、被害の大きい被地に報道も集中しがちだ。西日本豪雨から一年三カ月がたったが、まだ回り切れていない被災地はあり、そこには私たちが知らない課題も必ずある。地元に根付き、より多くの人に話を聞くことをこれからも続けていく。

司会・後藤厚三デスク

河北新報の北條哲広主任
中国新聞の鴻池尚記者

当時の紙面 生々しく

災害を報じる地元紙の紙面や写真パネルが展示された会場

震災直後の火災の写真、甚大な被害を報じる一面見出し…。会場には六十年前の伊勢湾台風から阪神大震災、十月の台風19号被害まで、国内で起きた七つの災害を報じる地元紙の紙面や写真のパネルなど約百六十枚が展示された。

東日本大震災時の河北新報の紙面は、「死者1万人超す」「9日ぶり2人救出 暗闇奇跡の光差す」などの横見出しが当時の空気を伝えた。

中国新聞社は、「記録が地域の防災意識を高め、悲しみが再び繰り返されぬよう、明日への備えの一助になることを願う」との言葉とともに、西日本豪雨で冠水した住宅街や土砂を運び出すボランティアなどの写真を並べた。

「備える」は、毎月第一月曜日に掲載予定。次回は十一月二日です。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています